半跏思惟像とは？

右足を左腿にのせて台座にすわり、右手を頬にあてて瞑想する姿の仏像を半跏(はんか)思惟(しゆい)像と称している。その起源はインドやガンダーラの仏像にさかのぼる。インドではマトゥラーにクシャン朝の独尊像の作例が知られるが、その尊格は不明である。一方、ガンダーラでは仏伝中の「樹下観耕」の場面において、すなわち出家前の釈迦が食物連鎖や世の無常に思い悩む姿として表された作例が知られるとともに、兜率天の弥勒にしたがう脇(きょう)侍(じ)像としても表された 。

そうしたガンダーラの半跏思惟像は中国にも伝えられた。ただし、中国では、仏伝では樹下観耕に続く、出家を決意し、愛馬と別離する場面において半跏思惟の姿が採用された 。また、弥勒の脇侍として表された他、単独像としても作られた。単独像は特に河北省や山東省に集中するが、河北省の作例にはしばしば「太子像」や「思惟像」の名が刻まれ、出家前の釈迦が思惟する姿を表したものであることが知られる。なお、ガンダーラや中国・北魏時代において弥勒の脇侍として表された半跏思惟像については、弥勒が住む天界にのぼるために瞑想（修行）する姿との説がある 。ただし、隋時代とされる敦煌莫高窟第 423 窟人字披西側の兜率天弥勒浄土図には、中央に兜率天宮で説法する交脚の弥勒菩薩像が描かれ、さらに右に摩頂・授記する菩薩倚坐像、左に供養を受ける菩薩半跏思惟像が描かれており、これらについてはともに弥勒とみることができるかもしれない。だとすれば、これに先行する弥勒の脇侍としての半跏思惟像についても弥勒である可能性が考えられるが、現時点ではなお不明と言わざるを得ない。

これに対して、日本の飛鳥時代では広隆寺像が弥勒と知られる他、大阪・野中寺(やちゅうじ)像に「弥勒」の名が刻まれ、半跏思惟像は弥勒として信仰されたようである。日本の半跏思惟像には如意輪観音と伝承されるものが多いが、それについては奈良時代以降の片脚踏み下げの観音像の流行や平安時代以降の聖徳太子信仰の隆盛のなかで尊名が変更されたためと考えられる。

このように中国では必ずしも弥勒でなかった半跏思惟像が、日本で弥勒として受容され、信仰されたのは朝鮮三国からの影響だと考えるのが順当であろう。しかしながら、三国時代の半跏思惟像については不明な点が多く、果たして弥勒として信仰されていたかどうかも厳密には不確定である。新羅の花郎信仰と弥勒菩薩との結びつきから半跏思惟像を弥勒とする見解があるものの 、花郎と半跏思惟像との関係は曖昧であり、少なくとも百済や高句麗の半跏思惟像についてはそれでは説明がつかない。これまでの研究において三国時代の半跏思惟像と弥勒との結びつきを具体的にしめしていると言えるのは、燕岐・蓮花寺に伝わる戊寅年（六七八）銘仏碑像の正面に阿弥陀浄土 、背面に半跏思惟像が浮き彫りされていることについて、『大無量寿経』に同経を弥勒に付嘱することが説かれていることに着目した図像解釈が今のところ唯一であろう 。

なお、中国の単独の半跏思惟像がすべて石造であるのに対して、韓国や日本には金銅仏が数多く伝来している。韓国では磨崖仏に他の尊像と組み合わせて表される例があるもの

の、単独の金銅仏が多数をしめ、その点で日韓両国の半跏思惟像には共通性がある。そして、その考究は韓国における半跏思惟像の尊格の問題、さらには 6〜7 世紀頃における両国の仏教信仰や両国間の文化交流について新たな展望をもたらしてくれる可能性がある。